

富士山に初雪（9 / 4）である。昨年と同じ、平年よりは10日早いという。富士山のシンボルといえば、あの白いドームもその一つであろう。このドームが撤去された。

昭和39年（1964）10月の運用開始から、35年の長きに亘って日本の台風観測の確かな「目」「20世紀の台風の砦」とも称された東京管区気象台富士山測候所の気象観測用レーダー「富士山レーダー」が、平成11年（1999）11月1日、その役目を終えて引退、平成13年（2001）8月中旬から解体作業が進められ、9月5日に終了した。（新聞記事）撤去されたドームや観測機器は新天地に於いて21世紀を担う子供達に夢とロマンを与えてくれよう。山頂に、お馴染みの、シンボルとも言えるドームがないのは寂しい気がするが、これも時代の趨勢か。

1 富士山測候所の沿革

昭和7年7月、富士山頂東安河原に中央気象台臨時富士山観測所が開設され、通年観測が開始された。昭和11年には観測所が山頂剣が峰に移転、16年には補給基地として御殿場事務所を開設。昭和22年東京管区気象台富士山観測所と改称。昭和39年10月、気象レーダー及び東京向レーダーリレー回線完成、運用開始。昭和48年山頂庁舎改築工事落成。更に昭和53年11月には、気象レーダー及びレーダーリレー装置更新、予備電源装置も更新。しかしながら、1977年7月、日本初の静止気象衛星「ひまわり」が打ち上げられ、赤道上空3.6万kmから日本全域はおろか支那（中国）大陸、南洋地域迄の探査が可能となり、富士山レーダーの役割は相対的に低下してきた。世界で最も高い位置に設置されたレーダーはこのようにして静かに引退していく。

2 物件概要

アルミニウム建築協議会のHPに因れば、資材運搬にはヘリコプターを使用せざるを得ないこと、建設機械の搬入と利用が実質的に不可能であること、屋外工事可能期間が2ヶ月という制約があること等の特殊な施行条件、又、冬期マイナス35.5度C、瞬間最大風速100m/sと言う気象条件を考慮してアルミニウム合金が採用された。庁舎工事は、大成建設が、レーダードームについては三菱電機が担任。レーダードームの外壁は、ガラス繊維強化プラスチックパネルである。レーダーは直径5メートル、円形パラボラである。

3 狙い・特徴等

富士山レーダーは、洋上から接近する台風を遠距離から補足し、又、梅雨前線や温帯低気圧等に伴うスケールの大きい雨域の全貌を把握するために設置された。

富士山頂のドーム最大探知距離は半径800キロメートル（函館から下関までをカバー）であり、平地に設置したレーダーに比して面積で約4倍の範囲を観測できる。雨雲の分布・移動方向・強さ等を広域且つ長時間連続して観測できるので、予報精度の向上に寄与している。平地のレーダーと同じ東京局からレーダーリレー回線を使って電源の投入・空中線の操作など観測に必要な操作を実施でき、映像を東京局で確認できる。

4 測候所勤務苦労話（御殿場基地事務所の海野幸夫氏談から）

（1）冬季の勤務交代のための登山：非常に危険

勤務交代と言うよりも完全に冬山登山。平成7年までは、専属強力

(須走在住の並木氏)と共に登山していたが、現在はアルバイト強力(有名登山家:山野井泰史氏、野沢井歩氏)2名と共に登山。登山口は御殿場口を利用。

注1:山野井氏は世界的なクライマーであり、ヒマラヤに単独・無酸素登山の経験がある。その体験を手記として出版されたり、各種のインタビューで紹介しておられる。

注2:並木氏は専門の強力としては最後の方である。現在は富士登山ブルの運転手。

(2) 感冒に注意

冬季に、熱が出るとほぼ肺炎を起こしてしまう。風邪を引かぬよう体調管理には神経を使う。海野氏の経験であるが、ある年の10月下旬風邪を引いた。早めに下山しようと思っている内に、遂に寝たきりの状態となり、急遽ブルで搬送された。この間、意識朦朧状態で、病院に收容されてから2週間入院したと言う。海野氏の知るところでは、感冒に罹患した所員がヘリにより病院に空輸されるという事が昭和46年12月にあったという。

(3) 恐怖の嵐

昭和41年9月26日の台風26号の際には、レーダー塔の二重扉のうち外側は破壊され、内側扉も中へ倒れかかってくるのを辛うじて突っかい棒で支えるという、際どい状態となったと、「富士山、その自然の全て」(著者:諏訪彰氏、同文書院)に著者の体験談として記述されている。25日1時半頃の最大瞬間風速は91km/hを記録した。風速90km/h超、想像出来ようか。

海野氏からも台風26号の風の凄さについてお聞きしたが、同書を読んで改めてその時の凄さを感じた次第である。

(4) 落雷が天敵

富士山の各山小屋は、雷発生時には発動発電機を停止させる。測候所は、通常は地中に埋設された6,000ボルトの電源回線から電気の供給を受けているが、雷発生時にはこの回線を遮断し、発発を稼働させて電源を確保する。落雷による室内の測定機器等が大きな被害を受けることはないが、精々ヒューズが飛ぶ程度である。

しかしながら、屋外にある、1基20万円以上もするアレッサ(避雷器)や風向風速測定装置には度々落雷があり、修理代が嵩むのが悩みである。夏と春先が落雷シーズンである。落雷から機器を守るために数段に渡るアレッサを設けている。更には、サージアブソーバーで、電気ショックを回避することも行われる。このように、雷対策は幾重にもなっており、万全だそうだ。

(5) 完全電化生活

基本的には、平地と同じだが、完全電化の生活である。6,000ボルトの電圧を100又は200ボルトに変圧している。風呂は雨水の畜水量により影響を受ける。平均すると5日に1回の入浴である。電気温水器で風呂を沸かす。勤務時間は0830から1700までであるが、何かあったら連続状況であることは言うまでもない。勤務期間は夏季、冬季により若干違うけれども3週間。

5 撤去後のドームの活用;子供にロマンを!

このドームの活用については富士吉田市と御殿場市が名乗りを上げたが、早くから利用計画を策定、2年も前から要望を繰り返してきた富士吉田市に提供されることとなった。御殿場はその歴史的経緯から考えれば最有力であったが、解体・撤去の情報収集の

遅れもあって、直前に名乗りを上げた事もあり、敗れた。

富士吉田市はドームと観測機器を市歴史民族博物館敷地内に展示する予定で、早ければ平成14年5月までに復元し、学習施設として活用する。

- 6 うろ覚えだが、前の大戦時には日本爆撃のB-29が先ず富士山頂のドームを目指して来たり、次いで進路変換したものだとの話をあったように思うが、何方か御教示賜れば幸いである。

(参考：富士山測候所御殿場基地提供資料、各新聞記事、AL建 (<http://www.alken.maininfo.co.jp/jsk/16.html>)